様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４２７
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2016
課題番号：２５５８０１８５

研究課題名（和文）ポスト口蹄疫・宮崎の和牛文化：国家政策と生殖テクノロジーが変える人と動物の関係

研究課題名（英文）Wagyu breeders, reproductive technology, and the politics of the state: an anthropological study of human-animal relationships in the post-Foot-and-Mouth Disease cattle industry in Miyazaki

研究代表者
大野　あきこ（ONO, AKIKO）

大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・研究員

研究者番号：８０６４８７３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：
口蹄疫禍からの復興に取り組む宮崎県の和牛繁殖農家が選択した経営方針は、経営効率化を最優先して平準化した和牛づくりを推奨する政府の方針と必ずしも親和的ではないことが明らかになった。これは、和牛生産の現場が、食肉産業に貢献するだけの作業ではなく、交配方法をめぐる知的ゲームや優良牛への投機の美学など、社会・文化的要素に彩られていることと密接に関係している。
またメディアは、畜産という生業について、殺すために育てる単純作業というステレオタイプ像を浸透させたが、それが日本の和牛づくり文化の本質といちじるしく乖離していることも示された。

研究成果の概要（英文）：　Wagyu calf breeders in Miyazaki have not been keen to accept, as measures to reestablish cattle production after the Foot-and-Mouth Disease outbreak, the government's basic policies that give priority to economic efficiency alone and encourage producing average-quality beef and cutting down the nurturing period. Such tendency among Wagyu breeders can be attributed to the highly sophisticated Wagyu production "culture" of Japan, in which cattle producers, in particular calf breeders, are enchanted with intellectual "games" for "genetic engineering" on their own and other commitments in the community such as owning and/or bidding for supreme heifer calves in pursuit of fortunes and honour of the family.
Contrary to the ethnographic evidence, the media discourse has emphasised the role of cattle farmers to link "cattle" in the paddock to "beef" on the table, and consequently established the stereotype of cattle breeding as important but unskilled labour.

研究分野：人類学

キーワード：人と動物　民族誌　和牛　口蹄疫　宮崎県

１．研究開始当初の背景

平成２２年４月に宮崎県で発生した口蹄疫では、２９万頭の偶蹄類の家畜（主に牛・豚）が殺処分された。児湯郡の東部５町においては、それぞれの生産農家が何世代もかけて築いた家畜の血統が断絶した。県ブランド「宮崎牛」に関しても、主要な種雄牛が断絶したために殺処分以前の血統の復元はありえず、新たな血統づくりが開始された。

研究代表者は、口蹄疫終息宣言直後から当該地域において和牛農家への聞き取り調査を行ってきたが、そこで生じた関心は、復興を方向づける国家政策と現代の生殖テクノロジーが、和牛づくりという宮崎独自の地域文化がはぐくんできた人と家畜の関係にどのような影響を及ぼしてゆくのか、という課題であった。

６００万頭の家畜が殺処分された平成１３年の英国口蹄疫大流行では、グローバルな産業構造との関連や国民の動物観の探究など、人類学者による社会的・文化的影響を分析した蓄積がある。宮崎県の口蹄疫禍についても、フィールドワークによる詳細な民族誌的（質的）データを収集することが喫緊の課題であったため、本研究を起案した。

２．研究の目的

本研究の目的は、畜産地帯という地域社会における人－動物の関係性を人類学的な立場から考察することである。とりわけ、口蹄疫禍からの復興を特徴づける国家政策と生殖テクノロジーが伝統的な人－家畜関係に与える影響に注目する。生業の現場および人びとの日常生活のフィールドワークを通して、養い主が家畜と過ごす方法・時間・質がいかなる影響を受け、口蹄疫禍後の人－家畜関係がいかなる展開を見せてゆくかを明らかにすることが本研究の第一の目的である。

また本研究では、食肉となるための「経済動物」という位置づけにある現代畜産産業の家畜を対象にする。現場の思考法についての民族誌的データをもちいて、「動物のいのち」、「家畜のいのち」をめぐる人類学研究の諸理論を検証・再考することが本研究の最終目標である。

３．研究の方法

口蹄疫禍後の宮崎県の畜産地帯における、「子取り」農家と呼ばれる和牛繁殖農家のフィールドワークを中心に、民族誌的データの収集を基盤とした。

初年度は復興途上の和牛生産農家の血統の再構築と経営方針について、国家政策・地域の新体制（県有種牛の導入、６次産業化、民間の種牛造成事業など）への関心をめぐって現地調査を行った。翌年度以降は文化・宗教的領域へと視野を移し、進歩する生殖テクノロジーと変化する農業政策を受け入れる人びとの生業と暮らしの参与観察・聞き取り調査を行い、質的データの収集に重点を置いた。

これらに並行して、口蹄疫禍関連の出版物と地元新聞のデータベースをもとに「家畜のいのち」をめぐるメディア言説の収集、牛馬守護寺社仏閣の調査、古老の聞き取りを含め、日本および宮崎県独自の和牛文化にまつわる歴史的資料の収集を資料館、博物館等で実施した。

４．研究成果

【研究の主な成果】

(1)国家の復興政策と最新生殖テクノロジーが畜産経営の現場におよぼす影響

近年、日本政府の家畜改良増殖計画は従来の「霜降り高級肉」から「平均的な品質で早く育つ」和牛づくりへと方向転換し、また、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）や輸入飼料の高騰に対応するために、大規模化やET（受精卵移植）子牛による経営効率化の方針が打ち出されている。

だが、調査地域では口蹄疫後も、高齢・小規模農家であっても従来どおりの経営を継続してゆきたいという期待が強かった。和牛づくりは高齢者でもやれるという文化的・技術的背景があるからである。たとえば、会社勤めの子が定年退職後でも後継者として十分だという期待が多く語られていた。

また、和牛農家の間では、表現形を競う畜産共進会入賞という地域共同体をあげての名誉や、高価な産子を多産する名牛を「当てる」といった投機的な美学が頻繁に語られた。日本国内の和牛育種の現場では、各自治体で造成された膨大な血統体系が移り変わりの早い流行に左右されるという独自の環境がある。繁殖農家は優良子牛になる血統を築くために、交配の工夫に心血を注ぐ。

畜産という生業の現場は、食肉産業に貢献するだけではない知的刺激と、文化的・経済的なダイナミズムに彩られているのである。表現形の美しい牛づくりを人生の愉しみとみなす和牛繁殖農家は、時には利益を度外視しても名誉を求める思いを語る。このように、地域社会の人々が和牛づくりにかける興味と喜びの本質は、血統（交配）戦略を練るという知的ゲームにあることが示唆された。

このような背景にある調査対象地域では、失われた和牛血統の再構築と経営再建のために様々に異なる実践がなされていた：

① 伝統的交配方針（県の事業団の有名種牛）を踏襲

② 新しい交配方針を取り入れる（県外および民間種牛を使用）
③ ６次産業化（生産から加工・販売までの一貫経営）参入
④ 県の事業団とは異なる育種哲学（血統構成）の種雄牛造成事業に参画
⑤ ET（受精卵移植）子牛経営に参入

①伝統的交配方針（県の事業団の有名種牛）を踏襲した農家も、②県外および民間種牛をあえて使用して新しい血統構成を取り入れた農家も、経営はおしなべて向上していた。口蹄疫による殺処分の結果、再導入した繁殖用母牛が必然的に人気のある最新の血統に更新されたことと、本研究の実施期間中に全国的に子牛価格が高騰したためである。（調査対象地域の子牛セリ市管内ではＨ２９年６月現在、子牛の平均価格はＨ２５年同月の２倍に近い 86.5 万円である。）

これは畜産政策が狙ったものではなく、生業の現場で起こった突発的な事情のせいで全国的な子牛不足が始まったためである。（和牛預託商法を行っていた大規模企業経営牧場がＨ２３年に破綻して１３万頭の肉牛を飼育していた全国３８か所の牧場が閉鎖されたことと、同年に起こった東日本大震災と原発事故により東北地方で畜産農家の廃業が多発したため。）

つぎに、③６次産業化を選択した事業主たちは、稀少血統牛の珍味や長期飼育手法などを付加価値にしてグルメ嗜好市場を狙い、効率化、均一化を推奨する政策とは反対の手段を取っていた。大規模化の政策にしたがうならば、小規模高齢者経営者が多い調査対象地域では残された道は廃業しかなく、また国が指導する「平均的な品質の和牛」をめざしても、現実的に市場では安価な輸入肉に対して競争力がもてないからである。和牛づくりの達人としての誇りが、経済効率第一の平準化した和牛づくりで生き延びる政府の方針に異議を唱えてさせていた。

また、④宮崎県ではタブーとされてきた民間での種雄牛造成には、二組の事業主らが取り組んでいた。どちらも国・県の家畜改良事業団の育種方針に批判的であった。現在、日本の和牛は種雄牛を含めて大半が「ハイブリッド（系統間交配）」となっている。その結果、地域の特質とは名ばかりで、日本の和牛血統はすでに平準化していることを事業主たちは問題にしていた。体積が大きく肉質が良いという経済性の高い肉牛を作るためにハイブリッドにする方法は正しいのであるが、種雄牛も繁殖母牛もハイブリッド化してしまうと必然的に遺伝力は弱くなる。

この状況を打開するために、民間事業主たちは国・県の事業団とは異なる育種哲学（血統構成）を掲げ、宮崎独自の特色をもたせること、遺伝力の強い種雄牛づくりをめざすこと、そして勉強会や講演会を組織して正しい交配知識で農家を啓蒙する活動を進めていた。本研究の期間中、当初の目的にほぼしたがって複数の民間種雄牛の精子ストローが県内で流通を開始した。現在、その産子が地域のセリ市上場されるようになり、血統づくりにおいて県内で農家の選択肢が広まる結果となった。

⑤ ET（受精卵移植）子牛経営モデルは、和牛の母体から受精卵を大量採取して乳牛に移植し、和牛増産と酪農農家の経営安定の両方をめざす。経済効率を最優先するこの国家政策によって、調査地域でも本研究の期間中に ET 子牛セリ市が開催されるようになった。経営向上への期待から今後浸透するものと考えられる。だがこの最新の生殖テクノロジーは、１年１産を理想に１０年前後母牛との関係をはぐくむ、という繁殖農家の生業と暮らしを根底から変えてしまうため、調査対象地域ではまだ参入農家は少ない。

以上のように、近年の国家政策は、必ずしも地域の生業現場の期待に沿うものではなく、また現場の取り組みは往々にして国家の方針と齟齬をきたすものであることが明らかになった。和牛生産農家は、人生をかけてきた和牛づくりのスタイルを変えて経済効率に屈するのではなく、多少のリスクがあっても自らの美学と誇りを保持できる経営方針を選択していた。日本の和牛生産の現場には、上述したように、食肉生産だけではない交配をめぐる知的ゲームや優良牛への投機の美学など、共同体生活と密着した社会・文化的要素が強く働いているからだと考えられる。

(2)「家畜のいのち」をめぐる現場の思考法

口蹄疫禍を契機に宮崎県内に浸透したメディア言説は、人と家畜の倫理的な関係に明確な解答を与えている。「牛たちを食卓へと橋渡しする役割」が農家の存在意義であり、「牛たちの生きてきた意味は食肉になることだ」という実利的な解釈である。メディアは、家畜は食肉になってこそ生をまっとうするという動物倫理観を補完するために、農家が「家畜を肉として食卓へ橋渡しする」役目を負う一面を強調し、畜産という生業について、殺すために育てる単純作業というステレオタイプ像を定着させた。

だが上述したように、日本の和牛づくりの現場は、食肉産業に貢献するだけの作業ではない、独自の知的・経済的活動に彩られている。和牛生産に携わる人びとは、一般社会の言説と対照的に、殺す（食べる）ために育てているという倫理的問題には無関心であった。口蹄疫の殺処分は不慮の事故と同一視され、農家は絶望と悲嘆に暮れた。だが、出荷（家畜との別れ）の際の悲しみの感情はフィールドワークでは一切語られなかった。セリ市は養い主にとってはむしろ喜びの場であった。子牛につく価格は、自らの和牛人生へ

の評価なのである。

もちろん、経済的利益に直結しない多様な理由による家畜への愛着は語られた。養い主たちは、家畜が「わが子」であるという慈しみの感情を表明する。だが、その際の人びとの興味の対象は、個体との関係性よりもむしろ、個々の個体を通して積み重ねた交配の結果でき上がった血統の総体に向けられている。試行錯誤を繰り返しながら行ってきた自己流の遺伝学実験の成果は、育種家としての名誉なのである。人間の家族との同一視に近い感情が語られる時は、長い年月のかかる血統の構築が自己の人生の合わせ鏡になっている場合が多く、愛着の感情は、多くの牛との遭遇を繰り返してきた自己の和牛人生にも向けられている。現場の思考法は、人間と動物を二分した上で動物の権利を認める西洋の「動物の権利」擁護論の人間中心主義とは一線を画し、むしろ人間と家畜の人生の境界線は曖昧模糊となっているのである。

このように、現場の思考をめぐるフィールドワークを通して浮かび上がってきた人－家畜の関係性は、上述のメディア言説とはいちじるしく乖離していることが明らかとなった。

【得られた成果の国内外における位置づけ】

人－動物の関係性研究のうち、人間と家畜についての人類学的研究では、生態・環境モデルや社会的・地域文化的モデルが従来採用されてきたが、本研究は地域の家畜の文化の変容について政治・経済的要因を連結した関係モデルを提示した。また、家畜のいのちをめぐっては、人－動物関係をめぐる人間中心主義の議論を再考するための材料となりうる民族誌的データが入手できた。このように、本研究で得られた諸成果は、国内外での人類学および関連諸分野では扱われてこなかった内容のものが多い。本研究によって、日本独自の方法と技術で家畜との関係を結ぶ人びとと生業の民族誌として「和牛文化」を世界に向けて発信できるだけでなく、その民族誌的データをもちいて、「動物のいのち」、「家畜のいのち」をめぐる人類学の諸理論を検証・再考する貢献が期待できる。

【今後の展望】

近年、オーストラリアを筆頭に世界の各地では WAGYU と呼ばれる牛肉の生産・消費ブームが起きている。このうちのほとんどは、日本の「和牛」（黒毛和種）の遺伝子を流用して日本以外の国で生産した交雑種の肉の名称である。「和牛」に似た味がするだけで、厳密には「和牛」の肉ではない。「和牛」の優良血統の遺伝子は、わが国で国家・自治体・和牛農家による長年の努力と投資によって築かれたものである。それは、本研究が明らかにしたように、食肉産業に貢献するだけではない、共同体生活と密着した日本独自の和牛づくりの文化と美学を生み出した。その貴重な国家の知的財産が国外に流出し、似て非なるもの――WAGYU 肉と WAGYU 食文化――に変容しているのである。それは光と影の両面を持つ、グローバル時代の社会・文化・経済問題である。流出先国の家畜文化の背景に分け入る人類学的手法でその過程を明らかにし、和牛遺伝子や商標の保護と活用をめぐる問題を検証してゆくことが、本研究の発展的課題として重要であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　１ 件）

<u>大野あきこ</u>「家畜殺しの現代的展開―2010年宮崎県・口蹄疫体験と子取り農家をめぐる一考察」日本文化人類学会第４７回研究大会 2013.6.8 慶応大学

６．研究組織
(1)研究代表者
大野　あきこ（ONO, AKIKO）
大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・研究員
研究者番号：80648733